

『ジッド=フォール往復書簡集』補遺

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1563580>

出版情報 : Stella. 34, pp.361-369, 2015-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



『ジッド＝フォール往復書簡集』補遺

吉 井 亮 雄

筆者は2012年、ジッドが『フランスのバラード』連作の著者にして季刊文芸誌『誌と散文』（1906-1914年）の主宰者ポール・フォールと交わした往復書簡集をフランスで公刊した¹⁾。幸いにも同書はいくつかの書評において好意的な評価をえたが、収録の対象となった現存コーパスに少なからず遺漏のあることは当初から明らかであった。じっさい筆者は、その後2度の機会をつうじ、ジッドのフォール宛未刊書簡3通のテキストを入手している。今後も新規資料の出現は予想されるが、編纂校訂者の責務として、まずはこれら3通（いずれも通し番号に「bis」を打つ）を提示・紹介しておきたい。なお各書簡の意味を精確に浮かび上がらせるために、隣接する既刊書簡も訳出し、また本稿末尾にはそれらすべてのフランス語原文を付す。

*

未刊書簡のうち时期的に最も早いのは1908年6月のもの。ジッドはこれを直接フォールに届けるよう、当時の個人秘書ピエール・ド・ラニユックスに託している²⁾——

《書簡 33 bis・ジッドのフォール宛》

[パリ, 1908年6月12日]

親愛なるポール・フォール

貴方の最新のバラード数篇を、氷菓を味わうように読んでいます。まさにパリを耐えさせ、この暑ささえも好きにならせる氷菓です。

『詩と散文』の第9号を2部 (deux exemplaires du Tome IX)、すなわち拙著『放蕩息子の帰宅』が掲載された号を2部、秘書のピエール・ド・ラニユックス青年に渡していただければまことに有り難く存じます。奥様によろしく。友愛の念をこめて。

アンドレ・ジッド

冒頭でジッドが言及するフォールの最新のバラード数篇とはまず間違いなく『詩と散文』第13号（1908年3-5月付）掲載の3篇「サン＝ジャン＝オ＝ボワ」「クシー＝ル＝シャトー」「ジュイ＝アン＝ジョザス」（同年、その抜刷が『フランスのバラード』第9巻として刊出）のこと。ちなみに『詩と散文』では号数を一般的な「Numéro」ではなく「Tome」で表示した。書簡後段の原文が「deux exemplaires du Tome IX」と記すのはそれに倣ってのことだが、この記述からは、次の書簡の「deux N^{os}」が「異なる2つの号」ではなく「当該号を2部」の謂であったことが明らかになる。

フォールとは連絡がつかぬまま数日が無為に過ぎる。やむをえずジッドは先の一筆とともに新たな書簡を送って雑誌の送付を依頼した――

《書簡34・ジッドのフォール宛》

ヴィラ・モンモランシー〔パリ、1908年6月17日〕

親愛なるポール・フォール

3日来、私の秘書が同封の手紙を携え、ラシーヌ通りからボワソナード通りへと貴方を訪ねまわりましたが、無駄足に終わりました。

私が所望する〔『詩と散文』当該号〕2部 (ces deux N^{os} que je souhaite) を送っていただけないでしょうか。敬具

アンドレ・ジッド

1908年6月17日

前段に記される「ラシーヌ通り（15番地）」は、当時『詩と散文』の印刷を請け負っていたジュエヴ出版のパリ事務所、また「ボワソナード通り（18番地）」はフォール宅の住所。なお、ジッドがかくまで入手を急いだ『放蕩息子の帰宅』のプレオリジナル2部ではあるが、それが追加の献呈にもちいられたのか、翌年初頭から始まる同作「ロクシダン文庫」版（1909年付、刊出は1910年1月）の準備のためだったのか、あるいはそれ以外の用途のためであったのか、具体的なところは残念ながら詳らかでない。

*

残り2通の未刊書簡は、ともに1909年初のもので、ジッドの3幕劇『パテシバ』の雑誌掲載に関連した内容である。まずは1月6日付を訳出しよう――

《書簡 34 bis・ジッドのフォール宛》

ヴィラ・モンモランシー [パリ], 1909年1月6日

親愛なるポール・フォール

オランダ紙刷りの『詩と散文』最新号をたしかに拝受。お礼申し上げます。

私の『バテシバ』（3幕劇）を〔貴誌の〕巻頭に掲載していただけないでしょうか。第3幕は未刊で（ドイツ語訳のみが既発表）、最初の2幕は『レルミタージュ』に載りましたが、そのことを覚えている者なぞおりますまい。

貴方にお会いできればと存じます。いずれ思い切つて貴方がたの会合に出席させていただくようにいたします。

ご夫妻に謹んで新年のお慶びを申し上げます。

アンドレ・ジッド

冒頭の「『詩と散文』最新号」とは、主宰者フォールのほかに、ポール・アダンやレミ・ド・ゲールモン、アルベール・モッケル、スチュアート・メリルら計20名が寄稿した第15号（1908年9-11月付）のこと³⁾。また「オランダ紙刷り」について一言すると、ジッドは同誌の定期購読者ではなかったが、創刊当初から主要な執筆予定者として遇され、毎号オランダ紙使用の豪華版を贈られていた⁴⁾。書簡の主要話題『バテシバ』は、記述にあるとおり、まずは最初の2幕が『レルミタージュ』誌の1903年1月号および2月号に掲載された。次いで1908年には、フランツ・ブライによるドイツ語全訳が彼の編集する文芸誌『ヒュペーリオン』に発表され、その後まもなくポツダムのグスタフ・キーペンホイヤー出版から単行書として上梓されていた⁵⁾。フランス語による完全版テキストは、後続書簡が伝えるようなジッド＝フォール間の遣り取りをへて、予定どおり『誌と散文』次号（第16号、1908年12月-1909年3月付）の巻頭に配される。

ジッド上掲書簡にたいしフォールは11日に返書を送る。その全訳を掲げるに先だち次を付記しておきたい——。公刊した往復書簡集では、「月曜」とのみ記されたこの返書を後掲書簡《36》と同じ「18日、月曜」のものと誤認していた。書簡《36》が会食の場所や時間を記していない点に注目し、それを同日に投函された催促状と見なしたためである（郵便事情が嘆かわしいまでに劣化した今日とはことなり、当時のパリでは同日内での往復信が珍しくなかったこともまた失考を誘う一因となった）。しかしジッド書簡《35 bis》の新情報により、日付の訂正とともに事の経緯を遺漏なく追うことが可能になったわけである。さ

て、以下に示すのがフォールの返書——

《書簡 35・フォールのジッド宛》

[パリ, 1909年1月11日] 月曜

親愛なるアンドレ・ジッド

『詩と散文』の次号巻頭に『バテシバ』を掲載させていただけるということでしょうか。それをご所望でしょうか。そうだとすれば、なんというご親切なお申し出でしょう。どうかテキストをお送りください。すぐに校正刷を出させます。戯曲の印刷が見事な体裁になるよう万全の努力を払う所存です。それにしても貴方には何とお礼を申しあげればよいことか。

この第16号の執筆陣には、素晴らしい方々、しごく気高い方々が並びます⁶⁾。

明日火曜日、私ども夫婦、そしてジャン・モレアス、サン＝ポール＝ルー（パリに暫時滞在中⁷⁾）と夕食をご一緒していただけないでしょうか。この申し出をお受けくだされば、我々4人、みな大いに嬉しく存じます。

午後7時（7時から7時15分のあいだ）にクロズリー・デ・リラのカフェで待ち合わせです。そのさい『バテシバ』をご持参いただけるでしょうか。

どうかお受けください。一言、ご返事を賜りたく。我々4人ともたいへん嬉しく存じます。あのリラで、親しく会食いたしましょう。敬具

ポール・フォール

[フィリップ・] ベルトロ夫妻もおそらくご一緒することになりましょう。

パリ、ボワソナード通り18番地

後半部の記述について一言——。クロズリー・デ・リラはフォールたちがしばしば会合に利用していたモンパルナス大通り171番地のカフェ・レストラン。彼ら以外にも、『新フランス評論』グループをはじめ多くの作家・芸術家たちの集う場所であった。また追伸で名の挙がるフィリップ・ベルトロは多くの同時代作家と交流があった文人肌の外交官（特に外務省でクローデルの庇護役的存在だったことはよく知られている）⁸⁾。

このフォールの誘いにたいし、ジッドは間をおかず次の返事を書き送っていたのである——

《書簡 35 bis・ジッドのフォール宛》

[パリ, 1909年1月11日ないし12日]

親愛なるポール・フォール

もちろん喜んで貴方の好意あるご招待をお受けしたいところですが、あいにく先日の晩、「セミラミス」観劇のさいに、ちょっとした風邪を引いてしまいました。大事をとって外出は控えることにいたします。

会食者の皆様に私の共感と遺憾の念をお伝えください。

またの機会にということにいたしましょう。奥様よろしくお伝えのほど。敬具

アンドレ・ジッド

『バテシバ』を同封いたします（あるいは少なくとも次便でお送りします）。

冒頭で言及される「セミラミス」とは、女優ヴェラ・セルジューヌがセミラミス役を演じたスウェーデン人劇作家グスタフ・コリーンの3幕劇『沈黙の塔』のことを指す。初演は同年1月9日、芸術座（後のエベルト座）で行われたが⁹⁾、この初演日と前掲のフォール書簡《35》の記述内容とを合わせ勘案するなら、ジッドの書簡が「11日ないし12日（会食当日）」のものであったことは疑いを容れない。

郵送したのか、あるいは秘書に届けさせたのか、方法こそ定かではないが、ジッドはさほど日を置かず『バテシバ』の原稿を『誌と散文』に委ねる。これを受けて翌週、フォールが再び彼を誘ったのが以下の書簡である。そこには文通者の風邪がすでに癒えたことを期待する旨も記されており、内容的にも先行書簡の遣り取りと完全に符合する――

《書簡 36・フォールのジッド宛》

[パリ, 1909年1月] 18日, 月曜

親愛なる友

明日火曜日、私が妻ともどもお願いしております内々のささやかな会食に、貴方が我らの友ジャン・モレアス、サン＝ポール＝ルーとご一緒くだされば大きな喜びであることを思いおこしていただけるのでしょうか。親愛なるアンドレ・ジッド、どうか我々にその喜びをお与えください。

貴方に訪れた恐るべき冬の娘を、ふたたび呼び戻すことなく、はるか遠くへと追い払いなさいと存じます。

良き知らせをお待ちします。敬具

ポール・フォール

『バテシバ』にかんしては如何ようのご心配もなく。万事抜き取り計らいます。このような傑作をお委ねいただき、何とお礼申しあげるべきでしょうか。かくて『誌と散文』にもそれなりの存在意義があろうかと。

詩人たちとの会食について付言すれば、ジッドは今回もフォールの誘いに応ずることができなかった。まさにフォール書簡と同じ日、キュヴェルヴィルの妻マドレーヌから彼らの庭師アルフォンス・ミューが危篤との差し迫った電報を

受け、急遽パリを離れざるをえなかったためである¹⁰⁾。

*

以上、新資料を紹介しつつ、関連するジッド=フォールの遣り取りを略述した。小稿冒頭に記したように、両者間の未刊書簡は今後も競売や古書市場に姿を現してくるものと予想される。筆者としては、できるだけその機会を逃さずコーパスのいっそうの充実をはかりたい。

註

- 1) Voir André GIDE - Paul FORT, *Correspondance (1893-1939)*. Édition établie, présentée et annotée par Akio YOSHII, Tupin et Semons : Centre d'Études Gidiennes, coll. «Gide / Textes», 2012.
- 2) ピエール・ド・ラニュクス (1887-1955) はジッド少年期のピアノ教師マルク・ド・ラニュクス (『贗金つかい』のラ・ペルーズ老人のモデル) の孫。1907年11月からジッドに仕え、翌年秋まで『狭き門』執筆の進捗に応じて同作のタイプ稿作成に従事。その後『新フランス評論』創刊にともない、作家の推挽をえて同誌の秘書となる。しかしながら事務処理能力の乏しさゆえに関係者たちからの評判は芳しからず、結果的に1911年末をもってその職をジャック・リヴィエールに譲ることとなった。
- 3) ごく初期をのぞき季刊誌『誌と散文』の発行は遅れがちで、表紙記載の最終月になっての刊出が常態化し、時には翌四半期にずれこむことさえあった。
- 4) 『誌と散文』が時折掲載した定期購読者の一覧にジッドの名が現れることはないが、彼が1925年に蔵書の一部を競売に付したさいの目録にはオランダ紙使用の豪華版一揃いが載っている (voir *Catalogue de livres et manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*, Paris : Édouard Champion, 1925, n° 393)。付言すれば、同誌の豪華版は局紙使用が25部、オランダ紙使用が45部刷られ (初年度のみ前者は40部、後者は100部)、またその表紙には、一般の目に馴染んだ普通紙版のモスグリーン色とはことなり、白色紙がもちいられた。これら2種の豪華版は1913年1-3月付の第32号まで刷られ、以後1914年1-3月付の最終第36号までは普通紙版のみとなった。
- 5) André GIDE, *Bethsabé*, dont les deux premières scènes avaient été publiées dans *L'Ermitage* de janvier (pp. 5-12) et de février 1903 (pp. 94-98) ; *Bathseba*. Dramatisches Gedicht in drei Monologen. Deutsch von Franz Blei, *Hyperion*, vol. 2, 1908, pp. 108-124, puis, en un volume séparé, au Gustav Kiepenheuer Verlag, coll.

- «Der dramatische Wille», 1908.
- 6) 実際にこの16号に作品が掲載されたのは、ジッドをはじめ、スチュアート・メリル、アンリ・ド・レニエ、ジャン・モレアス、ジャン・ド・ティナン、ジュール・ロマン、ジュリアン・オクセラ、計27名。
 - 7) 南仏生まれの象徴派詩人サン＝ポール＝ルーは一時期パリで文学活動をした後、1898年には首都を離れ、ブルターニュ地方フィニステール県に居を移していた。
 - 8) ベルトロの経歴については次の2著を参照—— Auguste BRÉAL, *Philippe Berthelot*, Paris : Gallimard, coll. «Les Contemporains vus de près», 1937 ; Jean-Luc BARRE, *Le Seigneur-Chat : Philippe Berthelot, 1866-1934*, Paris : Plon, 1988.
 - 9) Voir Edmond STOULLIG, *Les Annales du Théâtre et de la Musique*. Trente-cinquième année 1909, Paris : Libr. Paul Ollendorff, 1910, pp. 421-422.
 - 10) Voir la lettre de Gide à Jacques Rivière, du 18 janvier 1909, dans leur *Correspondance (1909-1925)*, éd. Pierre de GAULMYN et Alain RIVIÈRE, Paris : Gallimard, 1998, p. 36. ちなみに、1902年からジッド夫妻に仕えていたこの庭師はやがて病状を回復し、第1次大戦後までその任を果たすことになる。

Appendice :**33 bis. — ANDRÉ GIDE À PAUL FORT**

[Paris,] 12 juin [19]08.

Mon cher Paul Fort,

Je lis vos dernières ballades comme on déguste un sorbet — qui fait prendre Paris en patience, et même aimer cette chaleur.

Que vous seriez gentil si [vous] vouliez bien remettre au jeune Pierre de Lanux, mon secrétaire, porteur de ce mot, deux exemplaires du Tome IX de *Vers et Prose* — *id est* : celui contenant mon *Enfant Prodigue* !? — Merci. Tous mes hommages à Madame Paul Fort — et toutes mes amitiés

André Gide.

34. — ANDRÉ GIDE À PAUL FORT

Villa Montmorency [Paris, 17 juin 1908.]

Mon cher Paul Fort,

Porteur du mot ci-joint, mon secrétaire court après vous depuis 3 jours de Racine à Boissonade en vain.

Aurez-vous l'obligeance de m'envoyer ici ces deux N^{os} que je souhaite ?

Bien affectueusement votre

André Gide.

17 juin 1908.

34 bis. — ANDRÉ GIDE À PAUL FORT

Villa Montmorency [Paris], 6 janvier [19]09.

Mon cher Paul Fort,

J'ai bien reçu le dernier *Vers et Prose* sur hollande — donc Merci.

Ouvriez-vous un N^o avec ma (3 actes) *Bethsabé* ? — dont troisième acte inédit (paru seulement en allemand) — et dont les deux premiers parus dans *L'Ermitage*... Qui s'en souvient ?? —

Aurais plaisir à vous revoir ; tâcherai de trouver assez d'audace pour venir à une de vos réunions.

Mille vœux de nouvel an pour vous et pour Madame Fort.

André Gide.

35. — PAUL FORT À ANDRÉ GIDE

[Paris,] Lundi [11 (et non pas 18) janvier 1909].

Mon cher André Gide,

C'est en tête de notre prochain recueil de *Vers et Prose* que je voudrais voir paraître *Bethsabé* ? Le voulez-vous ? Oui. Comme vous êtes bon. Envoyez-moi, je

vous en prie, le texte. Nous aurons des épreuves bientôt — et je ferai tout pour que typographiquement le drame ait un bel aspect. *Mais comment vous remercier!*

Vous serez en belle compagnie, en très noble compagnie, dans ce Tome XVI.

Voulez-vous faire à Madame Paul Fort et à moi le plaisir de dîner demain Mardi en notre compagnie et en celle de Jean Moréas et de St-Pol-Roux (de passage à Paris). Agrérez cette invitation, vous nous rendrez tous quatre bien contents.

Le rendez-vous au Café de la Closerie des Lilas à 7 heures — entre 7 heures et 7 h 1/4. — Et m'apporteriez-vous *Bethsabé* ?

Acceptez. Un mot. Et nous sommes tous quatre bien contents. À ces Lilas — intimement — nous dînerons.

Affectueusement à vous

Paul Fort.

Les Berthelot seront peut-être des nôtres.

18 rue Boissonnade, Paris.

35 bis. — ANDRÉ GIDE À PAUL FORT

[Paris, 11 ou 12 janvier 1909].

Cher Paul Fort,

Où, j'accepterais avec joie votre amicale invitation ; mais j'ai pincé l'autre soir une espèce de grippe, à écouter Sémiramis. Plus prudent que je ne sorte pas.

Exprimez à vos convives mes sympathies et mes regrets.

Et à une autre fois n'est-ce pas. — Mes hommages à Madame Fort, je vous prie. Bien affectueusement

André Gide.

Ci-joint (ou du moins : par prochain courrier —) le *Bethsabé* —

36. — PAUL FORT À ANDRÉ GIDE

[Paris,] Lundi 18 [janvier 1909].

Mon cher ami,

Voulez-vous me permettre de vous faire souvenir que nous serions bien contents, Madame Paul Fort et moi, si demain Mardi vous vous joigniez à nos amis Jean Moréas et Saint-Pol-Roux, dans ce petit dîner intime auquel nous vous prions. Cher André Gide, tâchez de nous faire un grand plaisir.

J'espère que vous avez chassé loin de vous, avec le signe de ne plus y revenir, l'affreuse fille de l'hiver qui vous a visité.

J'attends une bonne réponse de vous et je vous prie de croire à mes sentiments les plus affectueux.

Paul Fort.

N'ayez aucune crainte pour *Bethsabé*. Je m'y reconnaitrai très bien. Comment vous remercier de nous avoir confié ce chef-d'œuvre. *Vers et Prose* a donc une raison d'être.